—大雪山のアイヌ語地名⑦—

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑰③

高橋 基

前回までの二回は、国土地理院の五万分の一地形図の「大雪山」のアイヌ語表記が、「ヌタプカウシペ」となった経緯を述べた。

今回は「大雪山のアイヌ伝説」を紹介する。ここでは、昭和六年の雑誌『蝦夷往来』に、河野広道が「大雪山頂の石器時代遺跡」の論文の付録として、「大雪山とアイヌ伝説」の二話を記した。その二話を紹介する。

第一話は、「カムイペツカウシ」である。河野は、「北欧の名河ラインに伝わるローレライの伝説に似た物語である」と書いている。

昔、クシロアイヌの大軍が、近文アイヌのイコロ(宝物)を奪い取ろうと、中央山脈の険を超えて、ひそかに攻め寄せて来た。そしてヌタクカムウシユペ(註—大雪山)の山頂で相談の結果、舟を造って川を下り、石狩川の本流に出でて、ひた押しに上川高原に押し寄せようと衆議一決した。

ところが、川を下って来る途中で、ふと山の方を見ると、峨々たる岩頭に、一糸纏わぬ裸女が、美しい声で歌を唱い、舞を舞うて居た。クシロアイヌ達が、思わずその裸女の妖しい美しさに見とれ、歌の妙に聞きほれて居る間に、舟は千仞の滝に落ち込んで、皆溺れ死んでしまった。

裸女はカムイで、姿を変えて上川アイヌ達を守ってくれたのである。

４代目・秋月橋から大雪山連峰を望む

さて、第二話は、最も有名な「カムイミンダラ」である。知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では、「kamuy-mintar(カムイミンタル)①熊の遊び場。②古くは山上の祭場をさしたらしい。—と、説明した上で、白老町のポンアヨロのカムイミンタルの写真を掲載している。

「大雪山」の場合は、カムイミンタルは、「神の遊び場」として、大雪山の別称としても用いられている。

河野広道は次のように記している。

ヌタクカムウシユペ(註—大雪山)の山頂帯、万年消ゆることのない大雪渓の間に、百花絢爛として咲き誇るお花畑に、足を踏み入れた者は、誰しも仙境に夢見る様な心地がして、雄大にして清浄なる大自然の美に思わず驚嘆の吐息を洩らす。

この仙境に、昔大きな池があって、清らかな融雪の水が、碧空の様な色をたたえて居た。池の岸には高山植物が一面に咲きつめて居た。

そこに夜な夜な天から神が天下って来て、池のほとりで様々の舞をまい、歌をうたって遊んだ。そこをアイヌ達は、カムイミンダラ(カムイ—神、ミンダラ—庭)と呼んで居る。

晴天の日に近文コタンからヌタクカムウシユペの山頂を望むと、ピカピカと日光に映え輝く場所があるが、其の処が即ちカムイミンダラである。

太田満執筆の『旭川アイヌ語辞典』では、次のようにカムイミンタラを解説している。

クマ猟をする者は旭岳にカムイノミしたが、そこにはカムイミンタラがあり、神謡の語るところ、クマも夜には人間の姿をして天下り、そこで遊び沼を泳ぎ、夜明けと共に慌てて天に戻る。

また、死んだカムイが皆行くカムイの墓であり、神の世には霊の階段があり、カムイの子孫はそこから天国に上ったという。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します